

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32511

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531307

研究課題名(和文) 幼児期のコミュニケーション能力の評価指標の作成と言語支援

研究課題名(英文) Development of the Assessment Scale of Communication Skills to support preschool children with special educational needs

研究代表者

瀬戸 淳子 (SETO, Junko)

帝京平成大学・健康メディカル学部・教授

研究者番号：70438985

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、特別な支援を必要とする幼児の言語発達支援にむけ、第1に、コミュニケーションの問題領域と程度をプロフィールとして表示できる保育教育者記入用の「保育場面における言語・コミュニケーションアセスメントシート」(6領域42項目)を作成した。第2に、幼児期のコミュニケーション能力発達評価指標の作成に向けて、会話やナラティブに関わる7種の課題を新たに作成し、4～6歳児83名を対象に基礎調査を行った。この結果、それぞれの課題特性や発達の年齢差が明らかになり、コミュニケーション能力の発達評価課題としての一定の有効性が示された。

研究成果の概要(英文)：A scale was developed for assessing communication skills in preschool children, and its validity for assessing these skills was investigated. Firstly, the Communication Assessment Scale was developed to screen and identify communication problems of preschool children, comprising of 42-items that evaluated six aspects of communication. Secondly, a test comprised of seven tasks for assessing conversational and narrative skills were developed, and children with typical development (N = 83, Age range 4-6 years of age) responded to the tasks. Then, developmental changes and developmental parameters of children were investigated by using the scale. Results suggested that this scale was effective for assessing communication skills of preschool children.

研究分野：臨床発達心理学・言語コミュニケーション障害

キーワード：コミュニケーション能力 幼児期 ナラティブスキル 評価指標の作成 発達アセスメント 特別支援

1. 研究開始当初の背景

平成 24 年に実施された文部科学省の全国実態調査によれば、発達障害の可能性があり特別な教育支援を必要とする児童生徒が、通常学級に 6.5%程度在籍していることが示された。一方、幼児期においても、秦野・瀬戸ら(2009,2010)が首都圏保育所 227 園の 3, 4, 5 歳児クラスにおいて実施した実態調査によると、明らかな知的遅れは見られないが特別な支援が必要な幼児の出現率は、11.6% (在園児 14,593 名中 1,691 名) であり、その内 4 名に 1 名 (26.4%) は言語に関わる問題を抱えていることが示された。また、その問題の内訳をみると、いわゆる構音や語彙、統語などの言語的知識の問題というより、集団活動の中での状況理解の弱さ、気持ちの言語化や表現力の乏しさ、会話の継続のしにくさなど、コミュニケーション能力の問題がより大きいことが示唆された。

日常生活と遊びを中心とした集団保育教育が行なわれる幼児期に、このような子どものコミュニケーション能力の特性を捉え、個別に適切な対応を丁寧に行うことで発達変化が期待される。しかし、既存の言語発達検査は語彙や統語などの言語的知識の評価が中心で、幼児期後期に発達する会話やナラティブスキルのようなコミュニケーション能力の発達機序の解明や評価の方法論については、十分に研究が進んでいない。そこで、本研究では、幼児期の保育・教育生活の中で必要とされるコミュニケーション能力をとらえる評価指標を作成し、保育教育現場での言語支援に活用することを目的とした。

2. 研究の目的

(1) 保育所や幼稚園などで特別な支援を必要とする幼児の言語・コミュニケーションの問題を把握するための、保育教育者記入用のアセスメントシートを作成する。

(2) 幼児期のコミュニケーション能力評価指標の作成に向けて①会話やナラティブスキルの発達を評価する課題を作成する。②作成した課題をもとに、幼児を対象に基礎調査を実施し、発達のプロセスを分析する。同時に、コミュニケーション能力評価課題としての適切性を検討する。

3. 研究の方法

(1) 言語・コミュニケーションアセスメントシートの作成のため、首都圏保育所 227 園を対象に実施した明らかな知的遅れは見られないが特別な支援が必要な幼児の実態調査(2008, 2009)で、一番気になる行動として「言語・ことば」に関する内容を挙げた 447 名の保育者の自由記述を、KJ 法に基づき分類し、チェック項目を抽出する。

(2) コミュニケーション能力評価指標の作成に向けて、①これまでの研究成果や既存の検査、臨床的観察をふまえ、幼児期のコミュニケーション能力を評価するために適して

いると推測される課題を作成し、予備調査観察を経て課題を決定する。②東京都内の幼稚園年中児年長児 83 名 (4 歳前半 4 名、4 歳後半 17 名、5 歳前半 23 名、5 歳後半 14 名、6 歳前半 15 名、6 歳後半 10 名) を対象に、1 日目にフォーマルスケール (LC スケール) による言語評価、2 日目に作成した 7 つの課題を実施する。すべての発話のトランスクリプトを作成し、課題ごとに分析視点を定め、年齢群ごとの発達を検討する。

4. 研究成果

(1) 言語・コミュニケーションアセスメントシートの作成についての研究成果

保育者の自由記述の分析結果をもとに、6 領域 42 項目 (会話: 6 項目、指示理解: 8 項目、言語理解: 7 項目、言語表出: 7 項目、表出面の特徴: 9 項目、気持ちの言語化: 5 項目) からなる「保育場面における言語・コミュニケーションアセスメントシート」を作成した。この回答結果は図 1 のように問題領域と程度がプロフィールとして示され、子どものコミュニケーションの特徴の把握や支援に有用であることが事例的に示された。

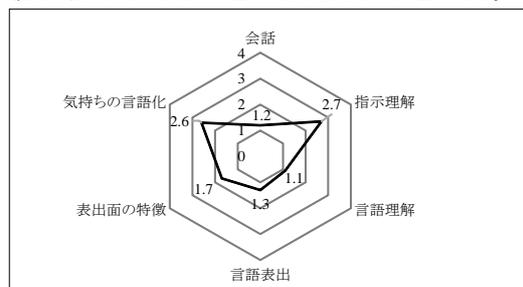


図 1 保育場面における言語・コミュニケーションアセスメントシートによる表示例

(2) コミュニケーション能力評価指標作成に向けた研究成果

① 幼児期のコミュニケーション能力発達評価のための課題の作成

コミュニケーション評価のための課題作成にあたっては、個人的な経験や内的状態についての語りなのか、それとも社会的文化的知識についての語りなのかという軸、発話の自由性・発展性が高いか低いという軸の 2 つの軸を設け、なるべく多様な視点からコミュニケーションについて評価できるように 7 種の課題を作成した(図 2)。

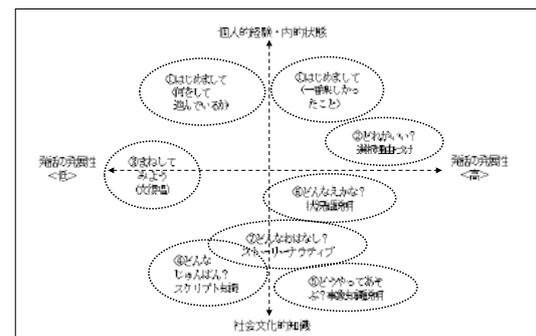


図 2 課題の構成

7種の課題内容は以下の通りである。

1. 「はじめまして」課題

子どもの個人的な経験内容（園と家での遊びの内容、最近一番楽しかったこと）に関しての質問に回答してもらう課題である。

2. 「ねえ どれがいい？」課題

複数の選択肢がある葛藤場面(図版使用)での自己決定について、その選択理由を説明してもらう課題である。材料として「ねえ、どれがいい？」(ジョン・バーニンガム作、まつかわまゆみ訳 評論社)より、調査材料としての出版社の利用許可を得て、4場面を選択し課題として用いた。

3. 「まねしてみよう」課題

短文の復唱課題であり、ワーキングメモリだけでなく文法的構造の知識も必要とする。これらは幼児期後期に発達するまとまった話を理解する力や発話内容の複雑さにも関係すると考えられる。練習2問と12問の課題がある。

4. 「どんな じゅんばん」課題

子どもがもつ日常経験のクリプト知識を言語化して説明してもらう課題である。まず最初と最後の事象についての絵がある図版(A)(図3上部)のみを用意し、矢印の空白部分でどんなことをするか順番に話してもらう。発話が一定基準に達しない場合は中間部に入る補助図版(B)を用意し、空いているスペースに順番に並べるよう促した後、絵を見ながら話してもらう。3問の課題がある。

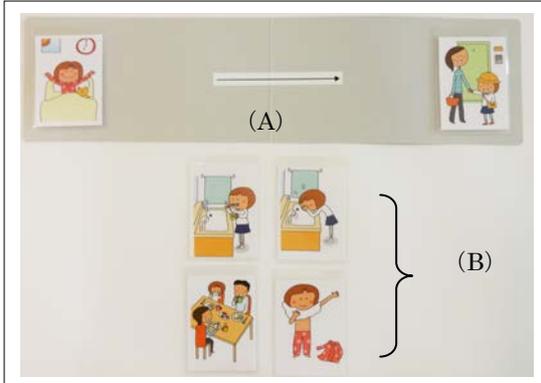


図3 「どんな じゅんばん？」課題の図版配置例

5. 「どうやって あそぶ？」課題

子どもが自分の体験する事象をどのように知識の中に取り入れ構造化していくのか、事象知識に関する語りの特徴を明らかにするために、いす取りなどの遊び方について説明してもらう。4問の課題がある。

6. 「どんな え かな？」課題

絵に描かれた状況について説明してもらう課題で、公園場面(図4)などの4枚の状況絵を作成した。絵に描かれている状況をこれまでの経験的知識をもとにどのように推測、解釈し言語化するかという語りの能力の評価と共に、語彙や構文など言語の意味的、統語論的発達評価が含まれる。

7. 「どんな おはなし？」課題

幼児期後期から学齢期にかけ高次化して



図4 「どんな え かな？」課題の状況絵の例

いくストーリーナラティブの発達の様相を明らかにするために、紙芝居を読み聞かせ、その後に絵の手がかりがない状態でどんなお話だったかを語ってもらう。材料として「クレヨンのはしご」(作・絵 板橋敦子 ひさかたチャイルド)の絵本の中から、出版社と著者の許可を得て、14場面(図5)の絵を選択し、原本の筋を変えずに各場面に合わせて表現をやや修正した物語文による字のない紙芝居を作成した。また、読み手の刺激提示を一定にするために、4分の紙芝居用CDを作成した。



図5 「どんな おはなし？」課題で使用した紙芝居「クレヨンのはしご」の一部

② 基礎調査からとらえられたコミュニケーション能力の発達プロセス

1. 選択場面における理由づけの発達（「ねえ どれがいい？」課題）

調査をした4場面のうち強いポジティブな感情、強いネガティブな感情、比較的マイルドなネガティブ感情を伴うと考えられる3場面を分析の対象とした。選択の理由づけについて、段階0：理由が不明確な段階、段階1：部分的説明段階、段階2：合理的説明段階の3つの水準に分類し、年齢群ごとの理由づけ水準の推移を検討した(図6)。

それぞれの課題特性によって高次の理由づけの出現時期や段階の推移はやや異なるが、選択の理由づけの発達プロセスとしては、選択はしたが選択理由を明確に表現できない段階(段階0)から、経験に基づく対象や事象に対する好感感情や部分的親近性などが選択理由として発話される段階(段階1)、

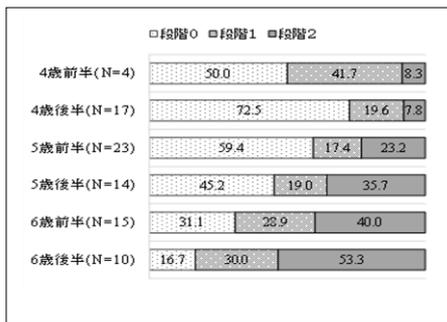


図6 選択場面における理由づけの水準

そして部分的ではあるが、他と比較してより明らかな利点を説明する段階（段階2-1）、そして最後に他との差異を一つ一つ取り上げながら明確な選択理由を説明する段階（段階2-2）へと徐々に発達すると考えられた。多くの子どもが最終段階2-2に達するのは7歳以降と考えられ、このような理由づけができるためには外界の認識や物事を捉える視点の広がり等の発達も関係すると推定された。

2. スクリプト知識の発達（「どんなじゅんばんん？」課題）

最初と最後の絵の中間部に入ると想定される4つ事象の内いくつかの事象の発話が出現したかについて示したのが図7である。場面ごとにスクリプト知識の発達にやや差がみられるが、3つの課題全体の結果をみると、4歳後半から発話される平均事象数が増加する傾向がみられ、特に6歳になるとそれぞれの場面で4つの事象のうち2~3事象について語る子どもが急増する傾向が示された。

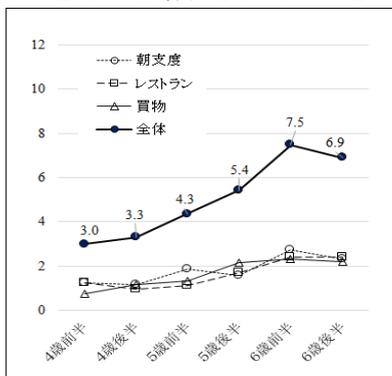


図7 「どんな じゅんばんん？」課題で発話された平均事象数

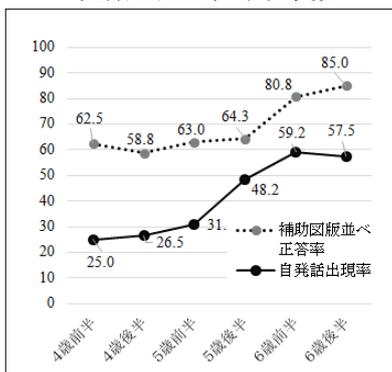


図8 補助図版並べの正答率

また、補助図版を使用した調査結果(図8)より、5歳前半までは事象の順序性は理解していても言葉で表現するのは困難な子どもが多いが、5歳後半から事象の発話の出現率が急速に上昇し、語りの能力が発達してくる様子が窺われた。また、補助図版により語りが促進される効果がみられた。

3. 事象知識の発達（「どうやってあそぶ？」課題）

遊び方の説明についての4つの課題の子どもに語りに含まれている事象内容は、開始ルール、骨格ルール、周辺ルール、終了ルールに分類された。語りに含まれる事象の比率は、骨格ルール>開始ルール・終了ルール>周辺ルールという大筋は認められるが、課題により語りの構成比率に違いがみられた。年齢ごとの語りの事象数平均値をみると、5歳後半から6歳前半に急上昇がみられた(図9)。

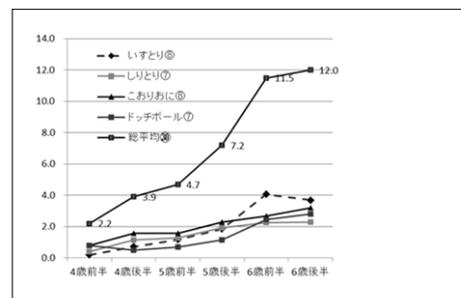


図9 遊び方の説明における語りの平均事象数

4. ストーリーナラティブの発達（「どんなおはなし？」課題）

語られた発話内容の構造分析を行うために物語の筋立てに必要な21の基本述語文を抽出し、内容から発端・展開・結末の7文ずつ3つの場面に分け、それぞれの場面ごとに語られた平均述語文数を算出した(図10)。

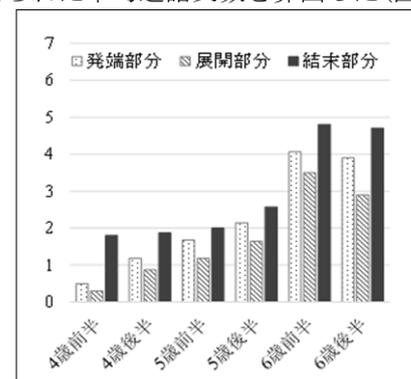


図10 「どんな おはなし？」課題で語られた平均述語文数

語られる内容は、結末部分>発端部分>展開部分の順に多く語られ、語られた述語文数は3場面とも5歳後半から6歳前半にかけて急上昇がみられた。また、語られる登場人物の平均数も5歳後半から6歳前半にかけて上昇する傾向が示された。また、図11には、上記のように物語を3つの場面に分けたとき

の発話場面数を示した。5歳後半から3場面すべてについての何らかの発話がある子どもが増え始め、6歳ではその割合が90%近くに達し、ほとんどの子どもが物語全体に注目していることが示された。

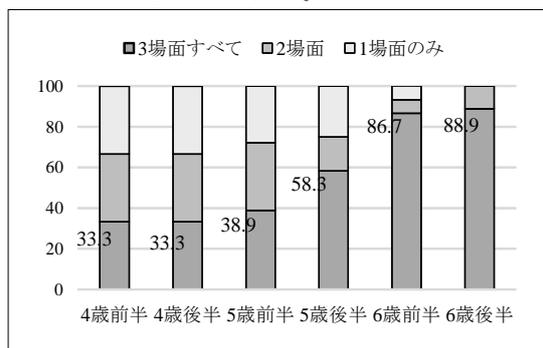


図 11 語られた場面数

5. 総括

おもな4つの課題の調査結果を取り上げたが、各課題の結果は、散布図でみると個人差が大きいことが示された。しかし、半年ごとの年齢群でそれぞれの課題の語りの事象数や水準等を比較すると、年齢上昇による変化がみられ、特に5歳から6歳前半にかけての変化が大きいことが示唆された。今後、課題相互間の関係等についても分析する必要がある。また、作成した課題はコミュニケーション能力の発達評価指標として一定の有効性が示されたが、実用化に向けては、対象年齢を学齢期まで広げ、各年齢群の人数を増やした拡大調査を実施する必要がある。

<引用文献>

- ① 秦野悦子、瀬戸淳子、野村直子、大澤絢乃、鈴木普子、隠村美子、保育者がとらえた知的遅れのない保育困難幼児の特徴(1) K市における公立保育所73園全数調査：気になる行動の因子構造、日本発達心理学会第20回大会発表論文集、2009、318
- ② 秦野悦子、瀬戸淳子、野村直子、大澤絢乃、鈴木普子、隠村美子、首都圏227保育所における特別ニーズ保育児の出現数：保育者がとらえた知的遅れのない保育困難幼児の特徴(4)、日本発達心理学会第21回大会発表論文集、2010、288
- ③ 瀬戸淳子、秦野悦子、大澤絢乃、野村直子、鈴木普子、隠村美子、保育者がとらえた知的遅れのない保育困難幼児の特徴(2) K市における公立保育所73園全数調査：保育者が一番気になる行動① 全体的傾向、日本発達心理学会第20回大会発表論文集、2009、319
- ④ 瀬戸淳子、秦野悦子、隠村美子、野村直子、大澤絢乃、鈴木普子、保育者が最も気になる特別ニーズ保育児の行動：保育者がとらえた知的遅れのない保育困難幼児の特徴(5)、日本発達心理学会第21回大会発表論文集、2010、289

5. 主な発表論文

[学会発表] (計7件)

- ① 瀬戸淳子、秦野悦子、4～6歳児の「どれがいい？」課題における選択の理由づけ、日本発達心理学会第26回大会発表論文集、2015、P6-057
- ② 秦野悦子、瀬戸淳子、4～6歳児の事象知識に関するナラティブ分析、日本発達心理学会第26回大会発表論文集、2015、P7-049
- ③ 瀬戸淳子、秦野悦子、4～6歳児のスク립ト知識の発達過程—ナラティブ発達指評作成に向けての基礎研究—、日本教育心理学会第56回大会発表論文集、2014、601
- ④ 瀬戸淳子、秦野悦子、4～6歳児のストーリーナラティブの分析—ナラティブ発達指評作成に向けての基礎研究—、日本心理学会第78回大会発表論文集、2014、1054
- ⑤ 瀬戸淳子、秦野悦子、ナラティブ発達指評作成に向けての基礎研究1—4～6歳児のストーリーナラティブに関する分析—、日本発達心理学会第25回大会発表論文集、2014、326
- ⑥ 秦野悦子、瀬戸淳子、ナラティブ発達指評作成に向けての基礎研究2—4～6歳児の事象知識に関するナラティブ分析—、日本発達心理学会第25回大会発表論文集、2014、327
- ⑦ 瀬戸淳子、秦野悦子、野村直子、鈴木普子、大澤絢乃、隠村美子、保育活動参加に関する行動アセスメント(2)—発達障害幼児の言語・コミュニケーションの評価—、日本特殊教育学会第50回大会発表論文集、2012、P3-M-5

[その他]

瀬戸淳子、秦野悦子、幼児期のコミュニケーション能力の評価指標の作成と言語支援、平成23～26年度科学研究費助成事業研究成果報告書(冊子)、2015、1-106

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瀬戸 淳子 (SETO, Junko)
 帝京平成大学・健康メディカル学部・教授
 研究者番号：70438985

(2) 研究分担者

秦野 悦子 (HATANO, Etsuko)
 白百合女子大学・文学部・教授
 研究者番号：50114921